

2019年5月30日

立教大学国際学術研究交流制度
2019年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	現代心理学部・教授
	氏名	江川 隆男
受入学部・研究科・研究所		現代心理学部
招へい 研究員	所属・職	Professor, Faculty of Philosophy, Jean Moulin Lyon 3 University 所属機関所在国：フランス
	氏名	Mauro Carbone
招へい期間		2019年5月16日～2019年5月23日（8日間）
研究経費		339,830円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2019年5月16日	来日
2019年5月17日	本学フランス語フランス文学研究室の教員と協定に関する懇談※
2019年5月18日	国際シンポジウム「権力とイメージ」（於日仏会館）で講演（参加者110名）
2019年5月20日	本学学生向けセミナー（人文研究センター）（参加者20名）
2019年5月22日	本学教員との共同研究へ向けての打ち合わせ
2019年5月23日	本学での研究期間終了
2019年5月24日	立命館大学で講演
2019年5月26日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

一週間と短い研究期間であったが、その間たいへん精力的に活動を行った。

5月17日には、立教とリヨン第三大学との協定の今後に関して、本学文学部文学科フランス文学専修の教員と懇談が行われた。現在、相互に学生の派遣を行っているだけでなく、ランゲージセンターのネイティブの教育講師に関しても、リヨン第三大学から推薦をいただいている。今後もこのような連携関係を密に推進していくことが確認された。また、リヨンでは既存の五大学が合併する方向で調整が進んでいるという、貴重な情報を得ることもできた。今後の教育および学術交流の進展に資するところの多いものであった。

5月18日には、日仏会館で行われた国際シンポジウム「権力とイマージュ」に参加し、「スクリーンはかけていないかのような眼鏡になりうるか」と題する講演を行った。聴衆の反応もよく、インパクトのある講演であった。主催者の手違いで、プログラム上にカルボーネ先生が本学の招聘研究員であることが明記されていなかったが、口頭でそのお詫びとともに紹介された。また、プログラムには立教大学が協力機関として記されている。

5月20日には、「プルーストと哲学」を主題にしたセミナーが現代心理学部と文学部の共催で、ロイドホール5階人文研究センターにて行われた。参加者の多くは大学院生であったが、その他に、学部生、本学の専任教員および兼任講師、また一般の参加もあり、2時間にわたってたいへん濃密なセミナーが行われた。周到に準備されたお話で、内容的には思想と文学をつなぐもので、学生たちから多くの質問がなされた。また、終わった後も、先生を囲んで話が尽きることがなかった。とりわけ、先生の専門に近い院生たちには、具体的なアドバイスなどもあり、学生や聴衆にとって有意義な内容であった。

5月22日には、将来的な共同研究の可能性についての話し合いが、本学教員となされた。本学には、カルボーネ先生が専門とするフランスの哲学者メルロ＝ポンティやドゥルーズ、また映像の問題を専攻する教員が複数おり、今後、なんらかの形で共同研究などが行われることは、リヨン第三大学、立教大学の双方にとって望ましいことであることが確認された。

（特記事項）本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

本学とリヨン第三大学とは、フランス語教育を中心にこれまでも、学生の派遣留学、ランゲージセンター教育講師の推薦、招聘研究員や派遣研究員制度による教員の交流などを活発に行ってきた。今後、共同研究や国際シンポジウムの協力などを含め、さらに学術交流を深めていくことが、複数回の懇談によって確認されたことは大きな収穫であった。